

I. 導入

おはようございます。先週のメッセージを振り返ってみましょう。ペトロとヨハネは、イエスの復活とすべての信徒への永遠の命にいたる復活の約束について宣べ伝えました。すると、ユダヤ教の神殿守衛者たちが憤慨しました。彼らは、使徒たちが語るのをやめさせようと、捕えて投獄するほど怒っていました。これは、多くの場所で今日でも未だ見られるクリスチャン迫害の始まりです。来週は、このことについてもっとお話する予定ですが、今日は、使徒たちの話の続きを見ていきましょう。では、使徒 4:5-12 を読みましょう。

II. Scripture Acts 4:5-12 (NIV 1984)

4:5 次の日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。 4:6 大祭司アンナスとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。 4:7 そして、使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか」と尋問した。 4:8 そのとき、ペトロは聖霊に満たされて言った。「民の議員、また長老の方々、 4:9 今日わたしたちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかということについてであるならば、 4:10 あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。 4:11 この方こそ、／『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、／隅の親石となった石』／です。 4:12 ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

III. 教え

ペトロとヨハネは大祭司の前に立たされ、尋問されました（ノエルの絵画）。そこには、多くの議員や長老たちもいました。しかし、ペトロは臆することなく、聖霊に満たされて大胆にイエスのことを語りました。ペトロは、彼らがイエスを十字架刑に処したこと、そして、神がイエスを死からよみがえらされたことを指摘しました。また、イエスの御名によって癒された足の不自由な男性についても話しました。そして、11 節で、イエスこそが「あなたがた家を建てる者に捨てられたが、隅の親石となった石」だと宣言しました。



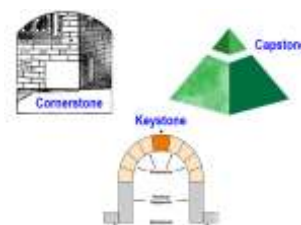
この預言の言葉は、詩篇 118:22 の引用です。ユダヤの指導者たちがイエスを退けたことで、この預言が成就したとペトロは言っています。イエスは、歴史における神の働きを築いていくべき人々によって排除されました。しかし、彼らがイエスを受け入れなくても、このお方は神の働きにおけるもっとも重要な部分となられたのです。

話は変わりますが、ここで聖書翻訳の問題について少し触れておきたいと思います。これは、すべて詩篇 118:22 です。どの訳も似たような表現ですが、イエスが何の石になられたかということについて、すべて違った単語を使っています。どの訳も、イエスは一番大切な石になられたということをお原語が語っているという点において同意しています。しかし、そ

Psalm (詩篇) 118:22	
The stone the builders rejected has become the capstone; (NIV)	家造りらの捨てた石は、隅のかしら石となった。(口語訳)
The stone which the builders rejected has become the chief cornerstone. (NKJV)	22(1)家を建てる者たちの捨てた石、それが礎の石になった。(新改訳)
The stone that the builders tossed aside has now become the most important stone. (CEV)	家を建てる者の退けた石が隅の親石となった。(新共同訳)

れが礎石なのかかしら石なのか、つまり、最初におく石なのか最後におく石なのかについて意見が一致していません。

けれども、あいまいな部分であっても、聖書は常にイエスを明らかに示します。このスライドをご覧ください。



礎石は、建物の土台となる最初におかれる石です。建造物を支える強さが要求されます。また、建物全体がまっすぐに建ってられるよう、寸分違わない精密さも要求されます。それに対して、かしら石とは最後に置かれる石です。冠石とも呼ばれ、建造物のもっとも美しい部分とされます。最後に、かなめ石はアーチの最頂部に差し入れて全体を固定するものです。ですから、礎石、かしら石、かなめ石は、それぞれ、初め、終わり、そして中心を意味するわけです。



これによって思い起こされることがあります。イエスがすべてを越えた主であられ、アルファでありオメガ、初めであり終わり、そして、すべてを支えておられるお方だということです。パウロは、コロサイ人への手紙でこれについて見事に記しています。

コロサイ 1:15-20 「1:15 御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。1:16 天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。1:17 御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。1:18 また、御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。1:19 神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、1:20 その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」

パウロは、イエスの独自性を雄弁に語ります。イエスは創造主であり、満ち溢れる神性がお方のうちにあります。イエスは欠けたところのない救い主です。私たちの罪の代価を十字架上で支払うため、ご自身の命をささげてくださいました。イエスは、ご自身の血によって、神と人とを和解させられました。神は、イエスをとおして、信じるすべての人に完全な赦しを無償で与えてくださいました。これらのことをよく考えるなら、救われるべき名が他にないというのも納得できるはずです。罪と死に対する完全な解決が一旦与えられたら、それ以外の解決法や名は必要ないからです。

そういうわけで、ペトロは信念をもって使徒 4:12 にある真理を主張します。「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」私たちは誰の名によって救いを求めるべきでしょうか。イエスの名です。わたしたちが救われるべき名は、他にはありません。

他の宗教はどうかと思う人もおられるかもしれません。現代社会では、どの宗教も本質的には同じだという考えが主流です。しかし実際には、それぞれの宗教では教えがずいぶん異なります。さまざまな宗教で、道徳観における共通点があるのは事実です。例えば、どんな宗教も人を殺すのは悪いことだというでしょう。また、多くの宗教には生活に役立つ知恵や思想があるかもしれません。

しかし、人間にとってもっとも重要な問いについては、宗教によってそれぞれ異なった答えが返ってきます。例えば、「人にとっての最大の問題とその解決策は何か」と仏教徒とクリスチャンに尋ねるなら、まったく違った答えが返ってくるでしょう。仏教では、人の最大の問題は苦で

あり、その解決は、執着・煩惱からの解脱であると言います。一方、クリスチャンは、人の最大の問題は神から私たちを引き離れた罪であり、その解決は、罪を悔い改め、イエス・キリストを信じる信仰により赦しを受け取ることだと言うでしょう。

仏教徒にとっては、苦しみが最大の問題です。クリスチャンにとっては、苦しみはさらに大きな問題、すなわち罪と天の父なる神から離れた状態、が引き起こした症状に過ぎないのです。このような宗教間の違いはたくさんありますが、今日のところはペトロが**使徒 4:12** で指摘したことにとどめておきたいと思います。ペトロは宣言します。「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

世の中にはいろいろな宗教があり、それぞれが違うものに救いを求めます。けれどもペトロは、イエスの名によってのみ救いを受けることができると言います。ヒンドゥー教には、三千万の神があると言われ、神道では八百万（やおよろず）の神と言われます。しかし、これらすべての神の存在を信じてその名を呼び求めても、その神々は天地の創造主なる神ではなく、罪と死から私たちを救ってはくれません。実際、何百万という数の神を信じるのは、何も信じないと大して変わりません。というのも、おびただしい数の神々の間で霊力が分散されてしまうので、それぞれの神は、神と呼ばれるにはあまりにもお粗末な力しか持たないことになるからです。

では、仏陀はどうでしょう。実は、他の神々と同じで仏陀もたくさんいるのです。仏教の多くの宗派は、いくつかの經典のみに注目し、釈迦牟尼の名のみを唱えます。しかし、大蔵經という仏教聖典の叢書には、何千という仏陀の名を列挙した多数の經典が含まれています。「仏陀」という単語は、実は人の名ではなく、仏の悟りを開いた人を指す称号なのです。



仏教では、如来でさえ、悟りを開く前は一般の人間です。例えば、阿弥陀如来はもとは法蔵菩薩という僧侶だったそうです。法蔵菩薩はこの世の者ではないかもしれない、他の世から来た者かもしれないという人もいますが、もともと僧侶であったことに変わりはありません。浄土真宗などの宗派においては、阿弥陀仏と唱えますが、それは神の名ではありません。仏となった僧侶の名を唱えているのです。法蔵菩薩が悟りを開いたのは無限に近い昔だといわれますが、阿弥陀が如来になる前は、一般の修行僧だったという基本的事実は変わりません。

これでわかるのは、仏教が常に人間を中心としたものだということです。小乗仏教では、悟りを開けるかは、本人の努力のみにかかっています。大乘仏教では、釈迦や先祖などから助けを得ることもできますが、結局は人間の努力に頼るほかないのです。そもそも、仏陀自身がもとは一般の僧侶だったからです。

しかし、聖書は、人が自分を救うことはできないとはっきり教えています。人間を中心とした制度は、どれほど精巧なものであっても罪と死から人を救う救いを与えることはできません。この墮落した世から超越した場所から来てくださる、罪とはまったく無関係の救い主が私たちには必要なのです。その救い主がイエスです。このお方は、主であり神なのです。

では、他の一神教はどうでしょう。キリスト教のように、ユダヤ教やイスラム教も全知全能の創造主を信じています。しかし、ユダヤ教の指導者たちはイエスを受け入れませんでした。イスラム教では、イエスを預言者と見なしていますが、主であり救い主であるとは認めていません。つまり、イエスを認めておらず、それ以外に救いを求めるべき救い主がいないのです。ということは、このふたつの宗教もまた、律法を守って善行を積もうという人間の努力に頼っているといえます。結果、どのようなことが言えるでしょう。ペトロが二千年前に主張したのと同じ結論です。私たちにはイエスが必要です。なぜなら、**(使徒 4:12)**「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

偉大な宗教家といわれる人々は、たいてい、人を自分自身に向かせようとはしません。むしろ、信仰の前進をもたらすであろう道徳規準や生活態度を指し示します。しかし、イエスはそのようなことはなさいませんでした。イエスは常に人をご自身に向かせようとなさいました。もしイエスがただの人だったら、それはまともなことではありません。どれほど賢くて強くて善い人でも、人がこの世を救うことはできません。しかし、イエスは創造主なる神です。被造物である人間に救いをもたらすために天から下ってきてくださったお方です。だからこそ、イエスは私たちのすべての必要を満たすことがおできになります。それが罪からの救いや永遠の命であってもしかりです。イエスは、どのような場合にも、どんな必要に対しても、その答えとしてご自身を指し示されました。

次の聖書箇所にあるイエスのことばをよく考えてみましょう：

ヨハネ 6:35 「イエスは言われた。『わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。』」

ヨハネ 8:12 「イエスは再び言われた。『わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。』」

ヨハネ 10:9 「わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。」

ヨハネ 10:11 「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」

ヨハネ 14:6 「イエスは言われた。『わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。』」

ヨハネ 15:5 「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」

イエスは、私たちの問題に対する解決として、また、私たちのすべてのニーズに対する答えとして、ご自身を指し示されます。このようなことを言うのは、次のどれかに違いありません。イエスは真理を語っておられるか、人をわざとだます悪人か、自分自身でもわけがわからない心を病んだ人かでしょう。C.S.ルイスはイエスについて、嘘つきか、常軌を逸した人か、本当にすべての主であるかだと言いました。私たちはみな選択を迫られています。C.S.ルイスはそれぞれの可能性を熟慮し、こう結論付けました。「彼が正気を失った人でも悪魔でもなかったことは、はっきりしているとわたしには思われる。となると、わたしは当然、彼は神であったし、今も神であるという見解を受け入れざるをえない。」

IV. 結び

今日のメッセージを終える前に、もうひとつ聖書箇所を分かち合いたいと思います。これは、先週のメッセージと今日のメッセージを結びつけるものです。イエスがラザロをよみがえらされる直前、ラザロの姉マルタに語られた場面です。ヨハネ 11:25-27 で、イエスがマルタに何と言われたか見てみましょう。「11:25 イエスは言われた。『わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。 11:26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。』 11:27 マルタは言った。『はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。』」

二千年前、イエスはご自身が復活であり命であると言われました。そして、マルタはこのお方を信じるという選択をしました。26 年前の 1986 年 3 月 22 日、私も同じ決断をしました。そして、私の罪を赦し、私の人生にお入りくださいとイエスに祈りました。あなたはもうどうでしょう。イエス

についていくという決断をもうしましたか。ここにいる人全員が、そして、そのご家族、ご友人、大切な人たちが、みんなそろってイエスについていくという決断ができるようにと祈ります。ぜひ今日その決断をしてください。イエスに従い、永遠の命という無償の賜物をいただくのに、今すぐほどふさわしいタイミングはありません。

祈りましょう。

V. 祈り

愛する天の父よ、

あなたの聖なる御名をたたえます。あなたの愛と恵みを感謝します。主よ、私たちは罪人です。言うべきでないことを口にし、するべきでないことをしてしまいます。すべきことをせず、言うべきことを言わずにいます。あなたの完全さにまったくおよびません。主よ、私たちは罪を告白し、イエスの名を呼び求めます。イエスの名によって、十字架上で成された業によって、どうか私たちの罪を赦してください。そして、あなたと和解させてください。主イエスよ、私たちの身代わりとなって十字架で死んでくださったことを感謝します。素晴らしい救いを備えてくださり、その偉大な愛を示してくださったことをありがとうございます。この世の救いのために流されたあなたの血潮の力により、私たちをきよめてください。あなたとの正しい関係へと導きいれてください。復活と永遠の命という無償の賜物を与えてください。あなたの聖霊で満たしてくださり、あなたの愛と恵みを周りの人々へ大胆に語るようにしてください。イエス様、感謝します。

主よ、どうぞ来てください。そして、あなたの民の必要を満たしてください。あなたはすべての必要をご存知です。悲しむ者には慰めを、弱い者には力を、病んでいる者には癒しを与えてください。あなたの無限の愛とあわれみによって、あなたのご栄光のために、民の必要を満たしてください。主よ、あなたにすべての栄光がありますように。私たちの人生において、家庭、教会、そしてこの国において、あなたが栄光をお受けになりますように。あなたの教会である私たちを備えてください。あなたが御力を帯びて再び来られる時に備えてください。イエスの尊き御名によって祈ります。アーメン。